

さくら第550号

令和7年10月

## さくら

発行所 さくらそろばん  
 発行者 平瀬重雄  
 春江町境 17-7・TEL51-1337  
 hirase@mx2.fctv.ne.jp

本  
 気  
 なんでいいからさ  
 本気でやっつこう  
 本気でやれば  
 たのしいから  
 本気でやれば  
 つかれなから  
 つかれも  
 つかれが  
 さわやかだから  
 みつと

## 『初心忘れずに550号発行』

「初心忘るべからず」とは、物事を始めた時の新鮮な気持ちや謙虚な姿勢を、どんなに経験を重ねても忘れてはいけないという教えるを表した言葉です。

これは、室町時代前期の応永年間(1394年～1428年)に成立した能楽師である世阿弥(ぜあみ)が作成した「風姿花伝・ふうしかでん」の中で説いた言葉です。

自己成長を続けるためには、初心を持ち続ける意識が重要です。毎日の仕事や学びの中で、初めて取り組んだ時の気持ちを忘れないことが成長への原動力となっています。

そのためには、定期的に自分の目標や原点を振り返る。新しい視点や知識を積極的に取り入れる。失敗や成功を素直に受け止め、次に生かすことです。

その時々々の年齢や社会情勢のなかで常に変化し成長するには「初心忘るべからず」の心構えと行動が重要です。

ところで、さくらそろばんの塾報「さくら」を発行して今月号で第550号となりました。第1号は1980年(昭和55年)1月8日に発行。B5版裏表の縦書きで今では見たことのないタイプライターを使って作成しました。

タイプライターが故障したので25号からは手書きで一字ずつ丁寧に時間をかけて書き込んで作った時期もあります。

やがてワードプロセッサ(ワープロ)が発売され、昭和60年11月の第71号からタイトルなどの大きな字などをワープロで作るようになりますがギザギザ文字で今とは雲泥の差でした

が、使用範囲が広がりました。昭和64年の第109号からワープロ専用で作りはじめ、やがてパソコンを使い今に至っています。

平成2年10月の第130号から1ページの冒頭に相田みつを氏の言葉を引用掲載しています。1994年6月12日に大阪で「故相田みつを展」開催中に会場へ出向き、ご子息の相田一人氏に掲載の許可をいただき、今もずっと使っております。

印刷機はこれまでに9回の機種変更を行い、第199号からは4色カラードラムを使い、2005年からは2頁と3頁をカラーコピー印刷に切り替えました。きれいな仕上がりを目指しその時々で新しい機種を選んできました。

初期のタイプライター使用での文字盤はタテ18cmでヨコ38cmに2,448字が項目別に配置され、1字ずつさがしてレバーを押すと、筒状に巻かれた原紙にパチンという音とともに打ち込まれます。

強いと原紙が破れ、弱いと印刷しても薄くて読み取ることができず、ずい分と苦労したものです。しかし、手書きと違い整っているので読みやすく綺麗でした。

通信機器と印刷機器も時代と共に進化します。開塾の時代では謄写版(とうしゃばん)を使い問題を印刷していました。1字1字をヤスリ板に原紙を置き鉄筆で書くので時間と神経を使います。

世阿弥が説く「初心忘るべからず」は、最初の志を忘れない、その事を初めてやった時の気持ちを忘れないということですが、その本質は、人生を七段階に分けてその年齢の時々々に即して行う事の初心を忘れず、向上せねばならないといひます。

第1号から第550号までにはその時代時代によりよい方法を求めてきました。変わらぬ思いは、そろばん学習を継続しレベルアップするための手助けとなるような励ましと努力を称える記事を書くことです。一人ひとりが歩む過程で起きる出来事に対して「初心不可忘(初心忘るべからず)」を継続しましょう。

おりとりてはらりとおもきすすきかな

季語||すすき(秋)

飯田蛇笏

折って取つてみると、はらりと重いススキであることだ